

欠陥Ωは孤独なα令息に愛を捧ぐ

あなたと過ごした五年間

## 1. 出会いと別れ エリオット side

「あ、やった！ よかったあ……」

目の前の掲示板に張り出された順位表を見て、俺はほっと息を吐いた。

今日は通っている王立貴族学園の一年次最後の試験結果の発表日だ。俺の順位は五位。前は九位だったから、かなり順位を上げられた。試験中も手応えを感じていたが、予想通りの結果に思わず小さくガッツポーズが出る。

「エリオット・キリングくん。今回はかなり順位を上げたようだね」

「え、と……」

試験結果に喜んでいて、背の高い男子生徒に声をかけられた。よく見てみると、この学園でも有名な侯爵令息だ。クラスも違うし関わったこともなかったため、急に話しかけられたことに驚き、曖昧な返事をしてしまった。それが不服だったのか、キュツと眉間に皺が寄せられ睨まれてしまう。「この俺を追い越すとはな。ただの凡庸なベータだと思っていたが、俺の考えが甘かったようだ」

「……え？」

そう言われ改めて掲示板を見てみると彼の順位は六位。ほんのわずかな点差ではあったが俺の方

が上だったようだ。

「次回はお前を立ち上げられないほどに打ち負かしてやる。今は精々、まぐれで勝った喜びを噛み締めているがいい。……ベータのくせにアルファを舐めるなよ」

彼はそう言うのと俺の肩を突き飛ばすように歩き去っていった。傷む肩に手を当ててしまう。……やっぱりアルファは傲慢な人が多い気がする。

はあ、と小さく溜め息を吐くと、改めて掲示板を眺めた。一位から十位まで、名前が載っているのは俺を除けば全員アルファだ。そしてチクチクと刺さるような視線を感じる。そっと目線を動かして確認すれば、どうやら俺よりも順位が低いアルファからのようだった。

暴言を吐かれたり暴力を振るわれたりといったことはないが、気に入らないという表情を隠しもしていない。彼らの心情は揃って「凡庸なベータのくせに」だろう。

彼らに、本当は俺がベータではなく『欠陥オメガ』だと明かしたら、ますます機嫌が悪くなったりするのだろうか。

内心また溜め息を吐き、そっとその場から離れることにした。

この世界には男女の性別の他に、アルファ、ベータ、オメガという三つの第二の性別がある。

最も人口が多いのはベータで総人口の約九割とされている。残った一割がアルファとオメガで約半数ずつ。ベータは一般的な人間だが、アルファとオメガはまったく違う。

アルファは容姿も聡明さも群を抜いており、支配階級に属していることがほとんど。一方オメガはアルファに選ばれるよう華奢で可憐な容姿を持つ者が多い。更にオメガは男女ともに大体三か月

に一度、『発情期』というものが訪れる。

発情期になったオメガは強いフェロモンを分泌し、優秀な遺伝子を残そうとアルファを惹きつけるようになる。そして発情期にアルファと性行為を行うことで、<sup>はら</sup>孕むことが可能となるのだ。

オメガの発情期は非常に厄介だ。発情中はとにかく<sup>はら</sup>孕むことを目的とするため、性的興奮が高まってしまう。しかも一週間ほど続くため、その間は日常生活を送れず、部屋に引き籠もらなければならない。

オメガのフェロモンに当てられたアルファは強制的に発情状態にされる。このことを『ラット』と呼んでいる。ラット状態となったアルファは目の前のオメガを孕ませることだけに支配され、どこであろうとオメガの中に精を放つことだけを考えるようになってしまう。

そういった事故を防ぐために、発情期のオメガの外出は禁止されている。

そして発情期のオメガと性行為を行ったアルファが、オメガの<sup>はら</sup>項を嚙むことによって『<sup>が</sup>番』契約が成立する。番関係となったアルファとオメガは互いのフェロモンだけに反応するようになり、オメガの発情期も非常に軽いものになる。

そんなちよつと生きづらそうなオメガ性だけど、今では改良された抑制剤のおかげで人間らしい生活を送れるようになっていた。

前世の記憶を取り戻した時、俺はつくづく自分の運命に感謝した。

俺は本来オメガだったのだ。だが五歳の時、<sup>はや</sup>流行り病に罹<sup>かか</sup>ってしまい高熱で生死の境をさまよった。その時、前世の記憶が蘇ると同時に、高熱の影響でオメガ性が未発達となり『欠陥オメガ』と

なってしまった。

オメガは男でも子どもを孕むことができる。直腸の奥に子宮と同じ機能を持つ生殖器があるのだが、その成長が止まってしまったというわけだ。

本来なら欠陥オメガという中途半端な存在になってしまったことを嘆くのだろう。俺の家は男爵家とはいえ、貴族。オメガであれば高位貴族との縁談だって夢じゃない。そんなところへ嫁ぐことができれば将来は安泰だ。今よりもっと裕福な生活を送ることもできるはずだ。

だが日本人男性だった前世の記憶を取り戻したことで、俺は欠陥オメガになったことを喜んだ。

いやだって男の俺が妊娠して出産する？ ムリムリムリムリ！ 絶対無理！

女性アルファと結婚しても孕むのはオメガである俺になる。男女の性別よりも、第二の性が重要になるのだ。ベータ女性を孕ませることは一応できる。が、どうしても発情期にオメガ性が強く出てしまうため、ベータ女性からは求められることはほとんどない。

それに俺は同性愛者ではない。だからアルファもベータも相手が男性である以上受け入れられない。

だから俺はベータとして生きることにした。医者からも『オメガとして覚醒することはない』と言われているし、前世と同じ感覚で生きていける。

オメガを苦しめる発情期もない。オメガのフェロモンも出ない。抑制剤も必要ない。ごく普通のベータとして生活ができる。

ベータのような人間しかいなかった前世の記憶を持つ俺にとって、『欠陥オメガ』となったこと

は幸運ではないのだ。

ちなみに高熱の影響により、オメガ性だけではなく、男性としての生殖機能もかなりダメージを受けてしまった。ベータとして生き、女性ベータと結婚しても子どもを望むことは難しいと医者に言われている。

だが、辛いことに俺には兄がいる。嫡男でもないし後継問題に関して今のところ不安を覚える必要はない。

自分に子どもができない代わりに、兄の子どもをめいっぱい可愛がってやるんだ。絶対、絶対可愛いはずだから。

「やっぱりベータだからなのか、さっきの威圧も何も感じていなかったよな」

「ベータの中でも鈍感なんだろうよ。あの威圧フェロモンを受けて何も感じないなんて鈍すぎだろ」

教室へ戻る途中、俺のことをコソコソと噂する声に耳にする。残念だけど鈍感というより感じられないんだよ。そう心の中で返答しておいた。

俺は『欠陥オメガ』になったことでアルファのフェロモンを感じることはなくなった。明らかに強烈な威圧フェロモンだった場合は流石にわかるのだろうか。生憎とそういった経験はないのでわからない。

噂をしていた彼らは恐らくベータなのだろう。同じくベータの俺が、アルファを押しつけ成績上位にすることが気に入らないのかもしれない。出る杭は打たれる、ということなのかな。だが出す

ぎた杭は打たれないとも言う。

なら『出すぎた杭』になつてやろう。俺はこの学園でなんとしても成績上位のまま卒業しなければならぬのだから。

そう気合いを入れ直したところで時計を見れば、バイトの時間が迫っていた。のんびりしている暇はなさそう。廊下を走りたいところだがぐっと堪え、足早にその場を離れることにした。

◇

夜の帳が下りると街の雰囲気はすっかり変わる。

場所によつては眩しい時間にはなかった淫猥な空気も漂い、紳士淑女のみな様も艶めかしい色を纏う人が増えていく。それはここ、ルトハイデ王国の王都も変わらない。

日夜、勉強とバイトに明け暮れていれば時が経つのは早いもの。

俺はあつという間に三学年へと進級していた。

初めて王都に出てきた時、都会つてすごいなと思ったものだ。学園の卒業まで残すところ二か月となつた今も同じ感想を抱き続けている。

「エリオット、これを奥の間に」

「はい」

料理がのせられたワゴンを押し進め、目的地へと向かう。皿の中身は銀のクロージュで隠されて

いるが、この中には涎が零れ落ちるほどの美味しい料理が詰まっている。

目的の部屋に到着すると扉をノックしそつと中へと入る。テーブルには紳士が四人、ワインを傾けながら談笑していた。

「お待ちせいました」

紳士の前に一つずつ、皿を置きクロージュを取る。ふわりとステーキのいい匂いが立ち込め、思わず喉がぐくりと音を立てそうになつた。そんな素振りを見せることなく、丁寧に給仕する。

目の前に現れた料理に、紳士たちも「おお」と感嘆の声を上げていた。

「うむ、いい香りだ。ここはいつ来ても酒も料理も裏切らないな」

一人の紳士がそう言えばみんな同調し、しきりに頷いている。それはそう。ここは王都の中でも一番の高級レストラン。料理も酒もとびきりのものが提供される。

食材からこだわり、シェフのお眼鏡にかなつただけが仕入れられ、またその研究と研鑽を重ねた技術で料理へと変貌する。

それは舌の肥えた紳士淑女でも虜にするのだ。

「そういえばグリフィス公爵家の噂を聞きましたかな？」

「ああ、あそこの息子の家庭教師の件だろう？」

「また駄目だったらしいな。それで今度は平民からも募集するとか。平民では流石に家庭教師は務まらんだろうに」

「それほど公爵が焦っているということでしょうか」

グリフィス公爵家の家庭教師？　もしかして就職先になりうる？　話を詳しく聞きたかったが俺はただの給仕。後ろ髪を引かれながらも一礼してその場を後にした。

その後もひたすら給仕に徹した。すべての客が引き払うと片付けや掃除に無心で取り組み、すべての仕事が終わった時はすでに日付が変わっていた。

「エリオット、お疲れさん。ほら、食べていけ」

「うわあ！　いつもありがとうございます！」

シェフが俺の前に分厚いステーキやサラダにスープ、それからふかふかのパンを出してくれた。

仕事が終わるところで<sup>まかな</sup>賄いを出してくれるのだが、こんな立派なステーキを出されたのは初めてだ。今日は何か祝い事でもあったのだろうか。

「これはオーナーからだ。お前の提案したことが大当たりしたらしくてな」

ということはランチ営業が成功したということだ。それを聞いてほっとすると同時に自分のことのように嬉しくなる。

このレストランは割と老舗なのだが、以前は夜のみの営業だった。それでも十分流行っていたのだが、新しい風を吹かせようとランチも始めたのだ。

だが知り合いの貴族の方々が数人訪れてくれるくらいで、あまり広がることはなかった。どうしても男性だと日中は仕事をしていることも多いし、ゆっくりワインを飲みながら食事をするというのも難しい。食事のメニューも夜に出されるものとそう変わらなかった。

そこで俺がターゲットを女性客に絞ってはどうかと提案したのだ。前世の世界でもちょっと小洒

落たお店でのランチは女性客が多かったし。

ここは高級レストランとしての風格や雰囲気は抜群にいいのだが、気楽なランチで、と考えるとちょっと趣が違う。

そこでテーブルクロスをランチの時だけ柔らかいピンク色や水色のものに替え、テーブルランナーは白にして全体の雰囲気優しく可愛らしくしてみてもどうか、メニューを女性が好むようなものに一新し、最後のデザートも三種類ほどを小さくワンプレートにしてみてもどうか、と言ってみただ。

それを聞いたオーナーがシェフと共にメニューを考案、提供したところ、とある公爵夫人が気に入ったらしく一気に王都のご婦人方へと広まった。

お茶会や食事は自宅で行うことが多いが、そのためには主催となる夫人が事前の手配から準備まで担わなくてはならない。だがレストランに来てくれればそういった手間が減る。

それに加えいつもと違う場所というだけで気持ちも変わるし、何より有名な高級レストランなのだから味や品質の問題もない。

仰々しいお茶会じゃなくても気の知れた友人と気軽に食事をするのにうってつけということもあり、昼は女性を中心、夜は男性が中心となり利用する人が増えたそうだ。

俺の提案を受け入れてくれるとは思わなかったが、オーナーたちにとっては目新しいことだったらしい。こんなところで前世の記憶が役に立つとは。それならば、とオーナーのお礼の気持ちが込められた賄いを美味しくいただくことにした。

「あ、そういえばグリフィス公爵家のことをご存じですか？」

ステーキを頬張りながら、給仕の時にお客様が話していたことを思い出し、尋ねてみた。だがこの噂話は結構有名らしく、知らなかった俺が信じられないものを見るような目を向けられてしまった。

仕方ないだろう。俺は貴族学園の学生ではあるが、貴族とは思えない苦学生だ。毎日毎日、夜はこうやってバイトをして金を稼ぎ、昼間はとにかく勉強に励む。

友人とゆつくり語り合ったり、遊びに行ったりする余裕なんてない。それもあと二か月ほどで終わるけど。

卒業を目前に控え、今は就職活動真っ只中。王宮で文官の道を進みたいと思っているが、希望の部署に受かるかどうか。

学園での成績は悪くはないけど、俺の希望は上級官吏。下位貴族の場合、希望部署への就職が難しくなってしまうのだ。俺の家は男爵家のため爵位で弾かれる可能性がある。

卒業目前なのに合格通知が届いていない時点で、落ちている可能性大。焦りは最高潮である。

明日はレストランの定休日。保険の意味も込めて、グリフィス公爵家の家庭教師の件を調べてみるのもいいかもしれないな。

賄いを綺麗に食べ終わると、シェフとオーナーに一言仕事を上げる挨拶をし、裏口から外に出た。今は初夏になるうかという季節だったが頬に当たる風は少し冷たい。

こっそりと忍び込むようにして学園の寮へと戻る。こんな時間に戻るなんて本来なら校則違反だ。

当然門の鍵はかかっており、入ることはできない。

だが俺は外壁の一部に人が一人通れるくらいの穴を発見した。草で上手く隠されており、どうやら先輩方の中にもここからこっそり出入りしていた人がいたようだ。内申点に響くためバレたらヤバイが、おかげ様で今までバレたことはない。だからといって油断もしないが。

周りをそっと警戒し、足音を立てずに寮の部屋へ。一階の部屋の窓から侵入する。学園の寮は一人部屋のため、同室者にバレる心配もない。部屋に戻りさえすれば大丈夫だ。

窓を閉めて鍵をかければ、自然とほっと息が漏れた。

軽くシャワーを浴びてベッドに倒れ込もうとしたのだが、テーブルの上に家族から送られてきた手紙が目に入った。今日の授業終わりに寮へ戻ると寮母さんから手紙が届いていると言われ受け取ったものだ。バイトに遅れると思い、そのままにしていたことを思い出す。

封を切り、中をあらためる。俺の体調を気にする言葉と共に「就職が難しければ無理をしなくてもいい。領地へ戻っておいで」と綴られていた。家族からの優しい言葉に思わず笑みが浮かぶ。

家になんの問題もないのなら、後継である兄を支えて領地と一緒に盛り立てていく選択もあっただろう。だけど俺の家はそれが許される状況ではない。自由に動ける次男である俺が、少しでも家族を助けるために、王都で就職して金を稼がなくてはならない。

机の引き出しからレターセットを取り出す。『俺は大丈夫。いい報告ができるよう頑張るよ』と書き記し、封筒へと仕舞った。

俺の家はとても貧しいものの、それが吹き飛ぶほど家族仲がよく愛情もとても深い。家族を助け



るためなら、これくらいの苦勞なんて大したことではない。

手紙を書き終えると眠気は最高潮に。ぼたりとベッドへ倒れ込むと全身の力が抜ける。今日もひたすら忙しかった。足が棒のようだ。一晚眠ればある程度回復するのは今の体が若いからだろう。それでも疲労感には逆らえず、俺はやってきた眠気に身を任せることになった。

翌日、眠い目を擦りながら授業を受け終えた。すぐに寮へと戻り制服を脱ぐと質素な私服に腕を通す。着替えてすぐ、飛び出すようにして街へと降りた。

向かう先は職業幹旋所。今のバイト先であるレストランを紹介してもらったのもここだ。白く塗られた木の扉を開け、一直線に案内所へと顔を出す。

「ララさん、こんにちは、聞きたいことがあって来たんですが」

「あら。エリオットさん」

学園に入学してからというものの、俺はここに何度も足を運び仕事を幹旋してもらった。レストランでバイトをする以前も、割のいい仕事を紹介してもらっている。その時に受付に座るこの女性、ララさんには随分とお世話になったのだ。

「グリフィス公爵家の家庭教師の件なんですけど……」

「ああ、あなたも面接希望なのね」

「あなたも、ということは結構な応募があるということでしょうか？」

そりゃそうよ、とララさんはグリフィス公爵家の家庭教師について教えてくれた。

グリフィス公爵家の嫡男は現在十歳。なんでもこの子がとてつもなく強いアルファらしいのだ。それ自体はとても喜ばしいことなのだが、アルファとしての能力が強すぎて自分で上手く制御ができないらしい。そのため、アルファのフェロモンや威圧で気絶する者が続出しているのだとか。

耐えられるのは上位アルファだけで、普通の人は近づくこともできないという。上位アルファが家庭教師を務めればいいのだが、上位アルファの数自体かなり少ない。

それに数少ない上位アルファは国の中枢で辣腕(らつばん)を振るっていることがほとんどだ。家庭教師をやる暇なんてないだろう。

まだ子どもだというのにそんなに強いフェロモンや威圧が出るのか、と俺は驚いた。しかも気絶する者が続出するなんて……

家庭教師を務められる人がなかなか見つけれず、とうとう平民でもなんでもいいから子どものフェロモンに耐えられる人を募集することになったそうだ。

「学園入学まであと五年でしょう？ それまでにある程度の教育が必要なのだけど、今のままじゃそれすら間に合わないらしいわ」

驚くべきことに、今できるのは文字の読み書き程度。十歳の高位貴族の子どもにしては、あまりにも酷い状況だ。それは公爵様も焦るだろう。

文字の読み書きができるから、本を読むことはできる。今はとりあえず一人で本を読み、知識を得ているのだそうだ。だが優秀なアルファといえども、子どもだったらわからないことだってたくさんあるはずだ。それを教えてくれる人が周りにいないのは辛いはず。



公爵様もなりふり構ってられない状況のため、務められる人には破格の給金が支払われるとのこと。それで希望者が殺到したが、みんな見事に撃沈しているらしい。

そんな状況なら俺も耐えられず気絶する可能性は高いのだが、俺自身もなりふり構ってられない。面接の予約を入れてもらい、その日は寮へと戻ることにした。

俺の実家キリング男爵家は王都から遠く離れた土地を治めている。

男爵家ではあるが、超がつく貧乏貴族である。事情により借金も莫大で、その生活は平民と変わらない。

貴族は必ず貴族学園に通う必要がある。授業料や寮費は免除なのだが、食事や制服、ノートやペンのなどの消耗品はタダじゃない。だから俺は領地への仕送りと自分の生活費などを稼ぐためにバイトに明け暮れる苦学生となった。

卒業後はそのまま王都で就職し、仕送りを続ける必要がある。そのため就職先はなるべく稼げる職場でなければ困るし、だからこそ勉強だって人一倍頑張ったのだ。

もし万が一、グリフィス公爵家の家庭教師の仕事が決まり、給金もかなりいいのなら願ってもない就職先だ。現状、上級官吏になれる可能性は正直低い。

家庭教師を務め上げ、その後、公爵様にどこかい就職先を紹介してもらおうという手もある。もしかしたら伝手で上級官吏になれるなんてこともあるかもしれない。コネ就職になるだろうが、使えるものはなんでも使わないといけないのだから躊躇はしない。

まあ俺がその子どものフェロモンに耐えられれば、の話だが。

無理だろうなと思うも、一パーセントでも可能性があるなら賭けてみるのも悪くない。俺に悩んでいる余裕なんてないのだから。

それから数日後の週末。面接を受けに件のグリフィス公爵家へと赴いた。そのお屋敷は、本当にここが個人宅なのかと疑うほどの豪邸だった。

なんというか、まず規模が桁違いだった。縦にも横にも大きく広く、建物の高さもかなりのもの。柱には細やかで繊細な彫刻まで施されており、玄関の扉はひたすら高く大きい。この建物に辿り着くまでも、見事な左右対称のトピアリーと噴水に出迎えられ度肝を抜かれた。なんだか前世見たどこかの国の宮殿のよう……

流石は公爵家。貴族の中でも最上位だけのことはある。

間抜け面を晒し呆けている俺に、ロマンズグレーが似合いすぎる執事は穏やかに微笑んでいた。かなり緊張しながらも慌てて面接に来たことを伝え、公爵様の元へ案内してもらうことに。

「初めまして。エリオット・キリングと申します」

「ああ、よく来てくれた。グリフィス公爵家当主、ブラムウェルだ」

応接間の中へ入り、しばらくすると公爵様がやってきた。とんでもない美丈夫なのだが、その第一印象は「なんだかお疲れだなあ」だった。

目の下の隈は濃く、若干頬がこけているようにも見える。嫡男の家庭教師探しがそれほど逼迫しているのだろう。

「君はもうすぐ卒業する学園の生徒らしいね。成績も申し分ない」

「ありがとうございます」

面接の予約を取り付けた時に、学園の成績表も一緒に渡していた。それにちゃんと目を通してもらえたのだと安心する。

「ここに来たということは息子のことをある程度知っていると思う。まずは息子に会ってもらいたいのだが、構わないか？」

「ええ、もちろんです」

家庭教師としての詳しい話の前に、先に息子に会ってほしいとは。まあ他の人と同様、気絶してしまうのなら話し損になるし当然か。

そういうわけで早速移動する。先を歩く公爵様のあとを付いていくのだが、何故か屋敷の外へと出てしまう。そのままずんずんと奥へ奥へと進むのだが、屋敷から少し離れたところにまた小さな屋敷が見えてきた。

先ほどいたところが本館で、こちらは別館ということだろうか。だが先ほどの本館とは違い、よく言えば素朴、悪く言えば地味。華やかさの欠片かけらもない、小さな屋敷だった。

「体の具合はどうだ？」

別館の入り口へと辿り着くと、公爵様は後ろを振り返り俺の様子を窺うかがう。何故そんなことを聞かれるのかわからず首を傾げた。

「え？ 特に、問題ありませんが……？」

「そうか……もし我慢しているなら無理をする必要はないぞ」

「いえ、我慢も何も、本当に問題はありませんよ……？」

んん？ 何を聞かれているんだろうか。よくわからないが、とりあえず何も問題ないことをアピールする。一瞬目を見開いた公爵様だったが、気を取り直して別館の中へと歩みを進めた。俺もそれに倣ならい、あとを付いていく。

室内も外観同様、質素な造りとなっていた。公爵家だから質はいいのだろうが、先ほどの本館を目にした後では残念感がものすごい。逆に寂しさを感じる雰囲気ですぐに少し戸惑う。

だが不思議と香りだけはとてもよく、爽やかなラベンダーのような香りが広がっている。俺の好きな香りだ。

やがて一つの扉の前に辿り着く。公爵様は俺の様子をチラリと見てから、扉をノックして俺たちの到着を告げた。返事を待つことなくガチャリと扉を開けると、そこには一人の美少年がソファに座って本を読んでいた。

「綺麗……」

思わずそう呟つぶやいてしまう。少年の圧倒的な美貌に驚き息を呑んだ。

眩しいほどの見事な銀髪。そして部屋に入ってきた俺を見つめる若葉色の瞳。無表情だが人形のように完璧で整った造形。着用している服は派手な装飾が何もない、ただのシャツと半ズボン。それなのに高貴な雰囲気が出ていた。

部屋の中はつきり言って質素だ。家具はテーブルとソファくらいしかなく、装飾も何もない。

だからなのか、その少年の存在感をより強く印象付けているような気がした。

俺は前世も含めて、ここまで圧倒的に綺麗な人を見たことがない。そして何故かきゅっと胸が絞られるように苦しくなり鼓動が速くなる。そんな自分に戸惑い、思わず胸に手を当てた。

俺は一体どうしたんだ……いくら美しいとはいえ、相手は十歳の少年だぞ。頭ではそうわかっているのに、胸の高鳴りを抑えることができそうになかった。

「ウルフラム、挨拶を」

「……はい。ウルフラム・グリフィスです」

公爵様に促され、少年は立ち上がり自己紹介をしてくれた。だがその所作は見た目の高貴さとは裏腹に自信なさげに見えた。目線は少し下を見ていて俺と視線が合うことはない。それでも耳に届いたその声は、少年特有のソプラノボイスで柔らかさを含んでいた。

そこでハッと俺は姿勢を直し、頭の中を切り替える。

「初めまして、ウルフラム様。エリオット・キリングと申します」

名前を告げ一礼。顔を上げると、驚きの表情を隠しもしない公爵様が凝視してきて、逆に俺が戸惑うことになる。

「……君は、大丈夫なのか？」

「はい？ え？」

「具合は、悪くないのか……？」

「……まったく、問題ございませんが」

俺がそう答えると、公爵様はみるみるうちに笑顔に変わる。それと対照的にウルフラム様は無表情のままだ。ちぐはぐな二人に困惑し、不躰ながら公爵様とウルフラム様を交互に見てしまった。

「そうか！ そうか！ ははははは！ ありがとう！ 君を歓迎しよう！」

「え？ え？」

公爵様はいきなり笑いだすと、俺の背中をバンバンと叩く。身構える余裕がなかったため、思いつきりダメージを受けてしまった。力が強すぎる……

ここで公爵様の言っていることに合点がいく。俺、ウルフラム様に会っても全然問題がない。

職業幹旋所で聞いた話では、ウルフラム様に会うとそのフェロモンで気絶するという話だった。

そのことがすっかりと頭から抜け落ちるほど、ウルフラム様の美しさは圧倒的だったということだ。

「ウルフラム、彼が今後、家庭教師としてここへ来ることになる。詳細は追って連絡しよう」

「……承知しました」

その時、ほんの少しウルフラム様の肩が震え、若葉色の瞳も不安げに揺れたような気がした。ウルフラム様にしてみれば、俺はどういう素性の人間かわからないから無理もない。

俺の家庭教師としての仕事はほぼ決まったようだ。なら安心させるように伝えなければ。

「あ、あのっ……ウルフラム様、楽しい授業ができるよう精一杯努めたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします」

「……はい」

そう返事をしてくれたが、ウルフラム様と視線が絡むことはない。それが少し寂しく感じた。

「ではウルフラム、我々は本館へと戻る」

公爵様はそう一言告げると俺を伴い部屋を出る。その際、ウルフラム様と一瞬目が合ったがすぐに逸らされてしまった。何かを期待するような……いや、そんなわけがないか。

「いやあ君が来てくれてよかった。早速雇用契約を結ぶことにしよう。まず、給金はこれくらいでどうだろうか?」

「ええっ!? こ、こんなに!? ちょ、ちょっと待ってください! なんですかこの金額は!?!」

本館の応接間へと戻るなり上機嫌な公爵様に開口一番こう言われ、金額の書かれた雇用契約書を目の前に出される。いきなりの急展開に付いていけない。しかも提示された給金は予想を遥かに上回る金額。上級官吏に匹敵、もしくはそれ以上の金額だろう。

俺の家庭教師としての能力もわからず、ウルフラム様と挨拶をしただけでこれほどの金額を提示される意味がわからない。

「なんだ、その金額では不満か? ならこれではどうだろうか?」

「い、ちょ、そういう問題じゃありません! 説明を求めます!」

「……そうだったな。いや、すまない。私もかなり気が急いでいたようだ」

公爵様はハツとして、一旦契約書を下げてくれた。それにほっとしつつ、公爵様の話を聞く。

どうしてこんな金額を提示したのか。その理由は、俺がウルフラム様となんの問題もなく挨拶できたからだという。

なんと面接に来た全員が、あの別館の入り口に辿り着くなり膝から崩れ落ちたのだという。ウルフラム様に会って挨拶までできた者は一人もいなかったらしい。彼の放つフェロモンはそれだけ強力だということだ。

まだ上手く制御ができず、駄々洩れとなるフェロモン。それに当てられ、息苦しさや圧迫感を感じて立っていらなくなるのだという。

これがもしオメガのフェロモンだったら誰かれ構わず発情状態になってしまふ。考えただけで恐ろしい。

アルファのフェロモンにはそういった発情誘発の効果はないが、相手を威圧することができる。普通のアルファは威圧を自分でコントロールできるのだが、ウルフラム様の場合はアルファとしての能力が高すぎて自分で制御ができない。

だから駄々洩れとなるフェロモンによって、ウルフラム様より弱い人は耐えられなくなってしまふのだ。

ちなみに第一性である男女の性別と違い、第二性であるアルファ性やオメガ性は大体五歳から遅くても十歳くらいで判明する。そして第二次性徴期のころに、第二性も徐々に育っていき、成人である十八歳のころには完全に育ちきると言われている。

第二性はゆつくりと発達していくため、アルファは自然とフェロモンや威圧を自分でコントロールできるようになる。だがウルフラム様の場合は生まれた時からアルファとしての能力が備わっており、フェロモンが駄々洩れ状態。

赤ちゃんの時にギャン泣きしたことで強いフェロモンと威圧が飛び、屋敷の使用人のほとんどが泡を吹いて気絶したそう。

そのため別館が建てられ、ウルフラム様は追いやられるようにして本館から離れることになった。ウルフラム様の世話ができるのは上位アルファのみ。公爵様自身や知り合いの上位アルファに来てもらい、慣れない育児をしていたのだそう。

つまり、あの別館には専属の使用人がずっといない。ウルフラム様は一人であの別館で生活しているのだ。

「あの……聞いていいのか迷いますが、公爵夫人はどうされているのですか？」

「……妻はオメガだ。息子のアルファ性が強すぎたことに恐怖を感じて、自ら会いに行くことはない」オメガだからこそ、アルファのフェロモンには敏感だ。たとえ公爵様と番関係になったとしても、そこまで強いアルファのフェロモンだと、息子でも恐怖が先に立つのだとか。

「あの子はずっと一人だ。私も時間が取れる時はなるべく顔を出してはいるが、付きつきりとはいかない。だからといってあの子の側にいられる人間は限られる。手詰まりなのだよ」

上位のアルファはそれだけで将来が約束されたようなものだ。何もかもが抜kindでた能力、素質、そして美貌。それを手にできるのだから。

だけどウルフラム様のように強すぎる上位アルファは、こんな孤独を強いられる。それをあの子は生まれてから今まで、ずっと一人で耐えてきたのか。

「だが君は問題なくウルフラムと面会できた。それだけで貴重な人材なのだよ」

なんで俺は何も問題がなかったんだろう。息苦しさも何も感じなかった。本当に普通だったのだ。俺は欠陥オメガだから誰かのフェロモンを感じることはないが、ウルフラム様のフェロモンはベータですら耐えられないと聞いている。公爵様の話でもそのようだったし。

「君はベータだから問題がなかったのかもしれない。それとも特別な何かがあるのか……わからないが、君がウルフラムと普段通りでいられるというのが重要だ。それに学園の成績だけではなく、君の人柄やキリング男爵家に関しても問題は見当たらない。私としては、ぜひ君に家庭教師をお願いしたいと思っている」

「ありがとうございます。……公爵様は実家のこともお調べになったんですね」

「それはそうだろう。いくら焦っているとはいえ、息子の家庭教師を頼むのだ。最低限の調査はしているさ」

そりゃそうか。大事な嫡男を預けるなら、慎重になるのも頷ける。きっと面接の応募には犯罪者まがいの人たちもそれなりにいたんだろう。

応募者は大勢いたという話だし、その人たちの裏を取るというのは簡単な話じゃない。公爵様の第一印象が「お疲れ」だと感じたのは無理もない。

それから俺の雇用契約は結ばれた。給金は最初に提示された金額を強く勧められた。実家の現状もご存じで、俺の仕事ぶりがよければ更に給金を上げてくれるそう。俄然やる気が出てきた。

俺はあと二か月ほどで卒業するが、それを待つことなくすぐに仕事を始めてほしいと提案を受けた。



平日は放課後に、週末は朝から一日。そして卒業後はウルフラム様が住んでいる別館で住み込みとなった。

俺は夜にレストランでバイトをしている。それも公爵様はご存じで（短期間でよくここまで調べたな……）、しかもそのレストランのオーナーは知り合いらしい。俺の事情を説明して仕事を辞めることも公爵様側で手配してくれることになった。

そしてこの家庭教師の仕事が終わったら、その後の就職先も紹介してくれると約束してくれた。とんでもない急展開だ。面接に来てそのまま雇用契約まで結び、卒業後の就職先が決まった。給金のために上級官吏を目指していたのに、それよりも高い給金の仕事をゲットし、将来の就職先まで不安がない。完璧すぎる。

「明日から早速よろしく頼む」

「はい。誠心誠意、努めたいと思います」

公爵様から仕事に必要な教材一式などを受け取り、馬車で寮まで送ってくれた。明日の朝も公爵家から迎えが来てくれるらしい。至れり尽くせりだ。

明日から早速家庭教師の仕事が始まるが、まずはウルフラム様がどれくらいの知識を得ているのか確認しないとな。それから授業内容を組み立てていくことにしよう。

あー、今までちゃんと勉強やってきて本当によかった。こんないい仕事が見つかるなんて思ってたかったし。領地にいる家族も就職のことを心配してたし、この前送ったばかりだけどまた手紙を出しておこう。

さらさらと就職先が決まったことと、今後の予定、俺は相変わらず元気にやっていると手紙に書き、寮母さんをお願いして手紙を出してもらおう。

今日からレストランのバイトに行かなくてもよくなったから、時間に余裕がある。貰った教材に目を通し内容を軽く頭に入れておくことにした。俺が子どもの時に習ったことと大差がないようだ。これならすぐにでも授業を始められるだろう。

あとは自分の予習復習に時間を当て、いつもよりかなり早い時間にベッドへと潜り込む。将来の不安も解消され、今日は最高にいい一日だった。明日から頑張ろうと、いい気分のまま眠りへと落ちていった。

翌朝、入学してからずっと続いていた睡眠不足が解消され、久しぶりにぐっすりと眠ったおかげで体がとても軽い。身支度もいつもより気合いが入る。

約束の時間に公爵家からの迎いの馬車に乗り、これから初出勤だ。

本館へは入らずそのまま別館へと向かう。ドキドキと高揚したまま、昨日と同じ応接間へと向かった。

扉をノックするとウルフラム様はすでに待っていたようで、扉を開けて中へと入る。昨日と同じようなシャツと半ズボンだったが、それでも相変わらず綺麗と表現したくなる子だ。

美しすぎて変な緊張を強いられているからか、知らず知らずドキドキと鼓動が速まった。

「おはようございます、ウルフラム様。本日よりよろしく願います」



「……よろしく」

俺は柔らかい印象を与えられる様、微笑みながら挨拶をした。だがウルフラム様はにこりともせず、言葉も少ない。

それを少し寂しいと思うものの、ほぼ初対面なのだから仕方ない。これから信頼関係を築いていかなければ。

「ではウルフラム様。今までどのようなことを勉強されていらつしやったのか、お聞かせいただけますで……でしょうか」

俺が室内に入り、ウルフラム様へと近づく。今まで何をしていたのか聞こうと思ったのだが、何故かウルフラム様はびくりと体を震わせた。思わず言葉尻も小さくなってしまふ。

「あの……何か気に障ることでもいたしましたでしょうか？」

「いや……そのつ……」

そう質問するとウルフラム様はますます縮こまってしまふ。顔は無表情を保とうとしているようだが、うろろと視線を迷わせ手をもじもじと動かしていた。

その姿が何か大きな不安を抱えているのではないかと心配になる。嫌なことがあるならなんでも言っしてほしい。

「私なら大丈夫ですよ、ウルフラム様。なんでも仰ってください」

「……僕に、あまり近づかない方が、いい、と……思う」

「え？」

そう語ったウルフラム様はそのまま俯いてしまった。小さな体がますます小さくなり、その姿に胸が苦しくなる。

「……あなたが、倒れるかも、しれないから……」

先ほどよりも更に小さな声になるウルフラム様。

ああ、そうか。きつと今まで近づいた人がどうなったのか、たくさん見てきたのだろう。

この子が何もしないなくても、目の前で人が倒れていく。それが自分のせいなのだと理解する。その時の悲しみはどれほどだっただろう。

それが大人になってからまだなんとかなったかもしれない。でもまだ何もわからない小さなころからこうだったなら、心に負った傷は深いだろう。

別館へと離され誰も側にいてくれず、ほとんどの時間を一人で過ごしてきた。昨日の公爵様の話でも、母親である公爵夫人はウルフラム様に会おうともしない。父親は仕事で忙しく、会える時間もごくわずか。

専属の使用人もおらず、この館に一人きり。寂しくても寂しいと言う相手もない。悲しくても、それを受け入れなくてはならない。

上位のアルファで将来が約束されていようと、どんなに素晴らしい美貌を持っていようと、どんなに家が裕福だろうとも。こんな小さな子どもが孤独に過ごさなければならぬ現状は残酷だ。俺の家ははつきり言っただけだ。家計も火の車で食事が芋だけだった日もある。

それでも家族の結束は強く、俺を愛情たっぷりに育ててくれた。両親も兄も、貧乏で苦しくても

笑顔を絶やさなかった。お金がなくても愛情はたくさんあったのだ。

俺は寂しいなんて思ったことはなかったし、家のために家族の役に立ちたかった。だから俺はどんなに大変でも家族のために少しでも仕送りをしたかったし、学園生活をがむしゃらに頑張ってきた。

でも目の前にいるこの子どもは、愛情というものを知らないのだと思う。自分のせいで誰かが傷つくとかわかって、どれほど寂しく苦しい思いをしてきたのだろう。

「っ……!? なにっ……」

俺は思わず目の前の子どもをぎゅっと抱きしめた。ウルフラム様は身を強張らせ、体を震わせている。きつと自分のせいで俺が倒れてしまうと怖がって。

こんなに孤独で辛い状況であっても人のことを慮れる優しい子。こんな子が孤独を選択せざるを得ない状況が、俺の胸を締め付ける。

かわいそう。そんな言葉は絶対言えない。それはウルフラム様を下に見る言葉だから。だけど哀れに思う気持ちは止まらない。

だからその寂しく傷ついた心を癒やしたいと、俺は大丈夫のだと知ってほしかった。

「ウルフラム様、大丈夫です。何故かはわかりませんが、私はウルフラム様のフェロモンを感じないのです。体はまったく辛くありません。だから私には言いたいこともやりたいことも、なんでも仰っていいんですよ」

「……ほ、本当に？」

「はい、本当です。怖がらなくていいんですよ」

俺がそう言うのと、ほっとしたようにウルフラム様の体から力が抜けた。

そのままおそるおそる俺の服をきゅっつつかむ。その仕草に胸を撃ち抜かれたような衝撃を受ける。

俺の手は自然とウルフラム様の頭へと伸び、サラサラな銀髪を優しく撫でる。きつとこうして頭を撫でられたことも少ないだろう。俺だけでもこの子に愛情を持つて接しよう。

そう心に決めた。

「ウルフラム様、一つ提案があるのですが」

「……提案？」

俺がそう声をかけると、ウルフラム様は俺の顔を見上げる。まだ無表情ではあるが、なんとも可愛らしくてきゅんとした。

「私はウルフラム様と仲良くなりたいと思っています。ですので『ウルフ様』と愛称で呼ぶことを許していただけますか？」

「え……？」

俺がそう言うのと、みるみるうちに大きく目を見開いた。困惑しているようだが、でもその若葉色の瞳はキラキラと輝いている。

嫌がっていない。嫌がるどころか、期待しているように感じた。

「……わかった、許す」

「ありがとうございます、ウルフ様！」

早速そう呼ぶと、ウルフ様は頬を赤く染めた。もうその姿が可愛すぎて、俺はまたぎゅーっと強く抱きしめる。するとウルフ様も先ほどよりも強く、俺の服をつかんでくれた。

そうだ！ 早速授業をしようと思っていたが、それはあと回した。まずはウルフ様と仲良くなることから始めたい。

「ウルフ様、もう一つ提案です。今日は天気もいいので、庭で一緒に遊びませんか？」

「……遊ぶ？」

きょんとしたウルフ様。遊ぶということがどういうことかわからないのだろう。そんなのは駄目だ。子どもはよく食べてよく遊び、よく眠る方がいい。

もちろん勉強もちゃんとするが、それよりも子どもとして楽しい時間を過ごすことの方が今のウルフ様には必要だ。それに遊ぶことだって立派な勉強になるだろう。

俺はウルフ様と手を繋ぎ、応接間を出て庭へと向かう。ぽかぽかとした陽気と爽やかな風。とても気持ちのいい日だ。さて、これから何をしようか。

流石は公爵家。木々もたくさん植えられていて緑がとても綺麗だ。日の光が木々の間から差し込み、それが一層緑の美しさを際立たせている。そんな緑の中をウルフ様と手を繋いで散歩する。

なんだか子どもの時を思い出す。キリング男爵領は自然に囲まれたド田舎だ。子どもの時はよく外を走り回り、木登りをして遊んだものだ。泥だらけにして親に怒られたけど、兄と一緒に遊んだあの日々はいい思い出だ。

「そうだ！ ウルフ様、追いかけてこしましょう！」

「……追いかけてこ？」

兄と一緒に駆け回ったあの日々は今でも楽しい思い出の一つとして胸の中にある。ウルフ様が気に入ってくれるかはわからないが、ウルフ様にもそういった経験をさせてあげたい。

「そうです。俺が追いかけますので捕まらないように逃げてください」

「え？ え？」

「ほらほら走って！ 捕まえますよ！」

「え、まっ、え？」

ウルフ様の背中を押して走れと促すと、戸惑いながらもぼてぼてと走り出す。やだなにそれ、可愛すぎる！ ちらちらと俺を振り返りながら走っている姿に胸がきゅんきゅんとしてしまった。ハッ！ 危ない危ない。ずっとその姿を見てしまうとこころだった。俺は鬼なんだから追いかけないと。

俺が軽く駆け出すとウルフ様は前を向いて走り出す。その動きはぎこちなく、でも一生懸命走っている。

たぶん、きっと今まで走ることもまともにしたことがないんだろうな。だって一人で屋敷の中で過ごしていて、走る必要なんてないんだから。俺はその小さな背中を追いかけて、距離を詰める。もう手を伸ばせば届く距離だ。

「捕まえてしまいますよー！ 頑張って走って！」

「えっ、待ってっ……!」

追いかける俺から逃げようと、ウルフ様はまた必死に走り出す。だが足が縛れたのか前へと体が傾いた。それを見て俺はすぐさま側に駆け寄り手を伸ばした。

「捕まえたっ!」

「わっ!」

あつぶね……ウルフ様が転ぶ前に後ろから抱き上げて転倒を回避。ウルフ様に怪我なんてさせられないからな。

「ははは、ウルフ様捕まってしまいましたね」

「うう……上手く走れなかった」

「いえいえ、とてもお上手でしたよ。次は私が逃げるので、ウルフ様が追いかけてください」

ウルフ様を地面に下ろし、今度は俺がタタタと駆け出す。するとウルフ様は俺を捕まえようと一生懸命走り出した。

ウルフ様の手が届きそうになつたら距離を離し、捕まえられそうで捕まえられない距離を作る。するとウルフ様はまた必死になって俺を捕まえようと追いかける。

しばらくするとウルフ様の走る姿が力強くなった。流星はアルファ。呑み込みが早い。走る速度も上がってきて、不安定さもすでない。

嬉しくなってもっと走らせたいところだが、俺は大人だからな。ウルフ様に花を持たせることも忘れない。

「捕まえた!」

「あゝ、捕まってしまいました」

ウルフ様は俺に体当たりするように抱きついた。それが可愛すぎて思わずぐっと持ち上げて抱っこしてしまう。それにびっくりしたウルフ様だったが、嫌がった様子は見られない。暴れたりせず、大人しく俺に抱っこされてくれた。

「どうでしたか? 初めての追いかけっこは」

「う、うん……楽しい、と思う」

あれ? 一生懸命走ってくれてたし、結構乗り気だった気がしたんだけど、ウルフ様の返事はちょっと微妙……?

「あ、あの……もう少し、やってみたい……」

「わかりました! やりましょう!」

でもまだやりたいとのこと。という気に入ってくれたということだ。だったら気が済むまでとことんやるぞ!

と意気込んだものの、先にバテたのは俺だった。堪らず地面に寝ころびぜえぜえと息を荒くする。子どもの、しかもアルファだから体力がすごい……。流星にウルフ様も息を乱してはいるが、俺みたいに倒れ込むほどではないようで、しゃきと立っていらっしやる。

「ちょ、ちょっと、待ってくださいねっ……」

「……わかった」

ウルフ様は俺の隣にちよこんと座ると、俺が落ち着くのを大人しく待っていてくれた。そんな俺たちの間をスーッと爽やかな風が駆け抜けていく。それがとても心地いい。

ウルフ様も気持ちがいいのか、目を瞑つぶって流れる風を感じているようだ。肩ほどに揃えられた銀髪がふわりと軽やかに揺れる。

息が整つてくると喉の渴きを覚え、別館に戻ることにした。手を差し出すとちよつと戸惑いながらも俺の手を取ってくれる。

ウルフ様は初めて会った時と同じようにずっと無表情を保っているが、時折表情が少しムズムズと動くことがあることに気がついた。

もつと仲良くなったら笑顔を見せてくれるかもしれない。そんな予感がした。

水分補給を終わらせたあとは、ウルフ様に別館の中を案内してもらうことにした。建物は二階建てだが、ウルフ様は一階で生活をしていたようだ。

自室と浴室、トイレやキッチンなどを見せてもらったのだが、なんていうか全体的に汚れが酷い。専属の使用人がいないのだから掃除なんてほとんどできていなかったのだろう。

こんな劣悪な環境にずっといたのかと思うと、段々と腹が立ってきた。せめてウルフ様の自室と水回りくらいは綺麗にしたい。

だがここでウルフ様のお腹がぐうつと音を立てる。それが恥ずかしかったのだろう。ウルフ様は顔を真っ赤にして俯いていた。

それすらも微笑ましくて思わず頭を撫でてしまう。

「いっぱい動いてお腹が空きましたね。先にお昼ご飯を食べましょうか。……そういえばご飯はどうされてたんですか？」

「……えつと、ご飯は、いつも執事のエドガーが玄関に置いてくれる」  
「……なるほど」

そう教えてくれたのでウルフ様と一緒に玄関へと向かう。するといつの間にかワゴンが置かれており、クローシュが被せられた皿とパンが盛られた籠が上にのつていた。

皿の数を見るに、俺の分もしっかりと用意されているようだ。

そのワゴンを押して応接間へと向かう。ご飯はいつもここで食べているらしい。

今思えば、玄関とこの部屋だけは綺麗にされていた。恐らく昨日、俺が面接に来るから掃除されていたのだろう。その以前はわからないが、他の部屋を見るにあまり掃除されてこなかったに違いない。

クローシュを外し、皿を並べようとした時。見た目は確かに美味しそうなのだが、その料理はすでに冷めている。スープも同じく冷たくなっていた。

「いつもこのような食事を？」

「そうだよ」

なんてことないように話すウルフ様。それにツキンと胸が痛んだが、それを隠して料理をテーブルへと並べた。

食前の祈りを捧げ、早速一口食べてみるものの、冷めた料理はそれだけで美味しさが半減する。

ウルフ様を見ると、慣れたようにただ黙々と食べていた。

確かにこの屋敷には使用人がいないのだから、出来立ての料理を食べる機会はないのだろう。だけれどこんな冷めた料理ばかりを食べてきたウルフ様が不憫でならない。

出来立ての温かい料理はそれだけで美味しい。今は温かい時期だからまだいいが、寒い冬に冷たい料理は体にも辛いはずだ。

そしてここでもウルフ様が一人で過ごしてきた弊害を見つけてしまう。

食事の姿勢が悪いのだ。カトラリーの使い方やマナー、それらを教わっていないことが丸わかりだった。

別に食べ方が汚いわけじゃない。でも公爵家という高位貴族の嫡男という目で見ると、明らかにマナーの修練不足だとわかるのだ。このままだと、この子が大人になって社会へ出た時に恥をかいてしまう。

俺も高位貴族としての礼儀作法を知っているわけじゃないが、これは矯正した方がいいだろう。いろいろと改善することが多いな。なんとかしないと。

だがそれよりも、まずは掃除をしてからだ。

「ウルフ様、またまた提案です。私は今から掃除をしたいと思います。よろしいでしょうか」「掃除？」

「はい。申し訳ないのですが、ここのお屋敷は正直言ってあまり綺麗とは言えません。それはウルフ様の健康にもよくないのです」

ウルフ様は上位のアルファだから体も他の人に比べて丈夫なだろう。だからと言って汚い場所にずっといるのは体に悪い。

それに学園を卒業したら俺もここに住み込みで働くことになる。使用人がいないのなら、自分たちでやるしかない。

ウルフ様に掃除道具があるのか聞いてみるも、わからないという返答。そのため昼食後に探検と称して屋敷内をあちこち漁<sup>あさ</sup>ってみた。すると屋敷の奥の小部屋に掃除道具が仕舞われているのを見。よかった。すぐに掃除が始められそうだ。

俺の家は貧乏で使用人なんて雇えず、掃除や料理は自分たちでやっていたのだ。その経験が活かせるとは皮肉なものだ。

「では申し訳ないのですが、ウルフ様は本を読んで待っててもらえますか？ 恐らくかなり時間がかかると思いますので」

「……僕も一緒にやってもいい？」

「え？」

公爵家の嫡男に掃除をさせてもいいのだろうか。戸惑って返事ができずにいると、ウルフ様はさつさと掃除道具を手にしてしまう。

うーん……ま、いつか。これも経験だ。もしこれが公爵様にバレて何か言われたら、平民の暮らしを学ばせていたとかなんとか言えはわかってくれるだろう。……たぶん。

ということでウルフ様も一緒に掃除をすることになった。まずはウルフ様の自室から。



ウルフ様の自室は思っていたより狭かった。ベッドに勉強用のテーブルと椅子、そしてソファにクローゼット。公爵家嫡男の自室とは思えない簡素さ。ここに置かれている家具にも装飾は何も見当たらなかった。

こう言っではなんだが、まるで俺の実家のよう。貧乏男爵家と同等など意味がわからない。それほどこの別館は公爵家に不釣り合いだった。

また感じた胸の痛みを押し殺し、掃除を始める。窓を開けて、掃き掃除と拭き掃除。背の高いところは俺が、低い場所はウルフ様にお任せだ。やり方を教えてやれば、「わかった」といいお返事。掃除なんてつまらなくてすぐに飽きるかと思っただが、ウルフ様は黙々と作業を進めている。

ベッドシーツもはがし、交換。これも案の定綺麗な状態ではなかった。

ウルフ様に聞くと、たまに執事のエドガーさんが交換してくれるのだと言う。エドガーさんもアルファらしいのだが、下位アルファのため長時間ここにいることはできなかったのだそう。

仕方ない状況とはいえ、なんともやるせない気持ちになる。

ウルフ様はある程度きちんと片付けていて、部屋はあまり散らかっていない。そのため予想よりも早く掃除が終わった。

「うん、綺麗になりましたね」

小さい体で頑張ってくれたウルフ様。「頑張りましたね」と、頭を撫でてあげると顔を真っ赤にして俯いてしまった。

それから風呂場やトイレも掃除をする。ウルフ様も一緒になって掃除をしてくれて、とっても頑

張ってくれた。時間はあつという間に過ぎ、すっかり夜になってしまう。

また玄関にワゴンが置かれていて食事の用意がされていた。だがやっぱり料理は冷めていた。

俺はそれに不満を覚えてしまうのだが、ウルフ様は表情を変えずに淡々と食べている。なんだかその様子が、『生きるために食べる作業』のように感じてしまう。

前世から俺は食べることが大好きだった。そして世の中には美味しいものがたくさんあることを知っている。

でもウルフ様はそれを知らないのだろう。冷めた料理は不味いわけではないが、特別美味しいとも思わない。

やっぱり温かい料理を食べてほしい。それだけで食事の楽しさは変わるはずだ。

これはあとで相談だな。前世にあった電子レンジが猛烈に恋しい。

そして風呂はどうしているのかと確認すると、予想通り一人が入っているとのこと。

公爵家の嫡男であれば、本来は使用人に手伝ってもらうのだろう。だがそれすらできず、小さなころから一人で風呂に入っていた。しかもあまり綺麗とは言えない浴室で。

仕方ないことだとはわかつてはいるが、どうしてもそのことに納得ができずまた腹が立つてしまった。

俺は着替えを持ってきていないため、一緒に入ることはできないが介助はできる。入浴を手伝うと言うと、戸惑いながらも了承してくれた。

ウルフ様の服を脱がせようとしたのだが、ウルフ様は自分で服を脱ぎだした。その時にハッと気

がついた。

ウルフ様が身に着けている服はシャツと半ズボンだ。公爵家の嫡男のわりに簡素な服だと思ったが、これは一人で脱ぎ着しやすくするためだったのだ。

使用人がいないのだから、複雑な服だと今のウルフ様では着られない。だからこそ簡単なもの。本来ならもっと豪華な服を着ていただろうに。

「先生？」

「あ、すみません！」

ウルフ様の服を手を考え込んでいたら声をかけられた。慌てて思考を切り替える。

袖をまくり、スラックスの裾をたくし上げて俺も浴室へ。ウルフ様の体が冷えてはいけなないと、掛け湯をさせて浴槽の中へと入ってもらおう。縁に頭を預けてもらい、洗髪をする。

ウルフ様の髪の毛はとても柔らかく滑らかだ。石鹸を付けて優しく洗ってあげると「気持ちいい」とうっとりとした声が出た。ウルフ様の表情も硬さが抜けたように見えて俺も嬉しくなる。

髪を洗い終わると今度は体だ。椅子に座ってもらい、石鹸を付けたタオルで背中を優しく洗う。前はウルフ様が自分でされるというのでお任せして、俺は背中と足を中心に洗い上げた。

その後もしっかりお湯に浸かって体を温めてもらい、風呂から上がる。水気をしっかり拭き取り服を着せ、それから髪を乾かし香油も付ければ、ぴかぴかなウルフ様の出来上がり。

「……先生、ありがとう。すごく、気持ちよかった」

「それはよかった」

掃除をした綺麗な風呂はそれだけで気持ちがいい。それに頭や体を洗うのも、子どもであるウルフ様じゃなかなか難しかっただろうし、いつもよりかなりすっきりとしたはずだ。少しでも快適に感じてくれたのならよかった。

ウルフ様は自室に戻るなり、うつらうつらとし始める。今日一日体を動かして疲れたのだろう。そのままベッドへ促したものの、ウルフ様の手は俺の手を強くつかんで離さなかった。

「……先生は明日も、来る？」

「はい、もちろんです。ただ明日は学園で授業があるので夕方ごろになります」

「……そっか」

ウルフ様のまぶたは今にも閉じられそうになっているが、それに抗うように強く俺の手が握られる。

はつきりとは言わないが、きっと寂しいのだと思う。だって俺が寮へ戻れば、またこの屋敷に一人ぼっちとなるのだから。

今日一日過ごしてみて感じたのは、ウルフ様は俺を嫌がってはいないこと。だがどうしていいのかわからないのだと思う。

追いかけても微妙かと思いきや、もっとやりたいと言ってくれたし、掃除も手伝ってくれた。俺のことが嫌なら、近寄ることもしないはずだ。

ただ気になったのは発言する時に少し迷っているというか、本当に言ってもいいのか悩んでるような雰囲気だったこと。引っ込み思案と言えいいのか。

ウルフ様は我慢している。そんな風に思えて仕方がなかった。

俺の手を握るウルフ様が痛々しく感じて胸が苦しい。あと二か月もしないうちに俺は学園を卒業する。そうすれば毎日側にいてあげられるのだが、今の現状はそうもいかない。

「ウルフ様、私は明日も必ず来ます。約束です。このお部屋で待っていてくださいね」

「……うん」

安心させるように頭を撫でてやれば、とうとう眠気に抗えずすーすーと寝息を立て始めた。それにほっとしつつ首元までしっかりと上掛けをかけてあげる。

「また明日、会いましょうね」

聞かえていないとわかつていても、どうしてもそんな言葉が漏れてしまう。ぐっすりと眠るウルフ様を一人残す罪悪感に苛まれながら、俺は部屋の灯りを落とし、そっと別館をあとにした。

そのまま本館へと向かい執事のエドガーさんと呼んでもらう。すぐに来てくれて、今後のことを相談することにした。

「あの、もしできるなら明日から食材を届けていただきたいのですが」

「食材、ですか？」

今日用意してもらった食事とても美味しかったのだが、冷めていたことが気になると正直に話した。それで俺が家庭教師の時は食事を作ることを提案したのだ。

もちろん本職の料理人のような素晴らしいものを作るわけじゃない。それでも出来立ての温かい料理を食べたことのないウルフ様には、自分で作っても食べさせたいと思ったのだ。

このことはエドガーさんの一存では決められないらしく、公爵様に相談してくれるとのこと。それから掃除も俺がすることを伝え、馬車に乗って寮へと戻った。

翌日。

いつも通り授業を受ける。だがどうしてもウルフ様のことが頭をよぎり、そわそわと落ち着かなかった。

授業が終わると制服を着替えることもせず、俺はすぐさま車寄せへと向かう。公爵家の豪華な馬車ですでに待っていて、飛び乗るようにしてウルフ様の待つ別館へと向かった。

今日は自室へ向かうと伝えていたので、そのまま部屋の扉をノックする。すぐにバタバタと音が聞こえ、勢いよく扉が開いた。

「……先生っ……!!」

「ウルフ様……お待たせしました」

俺の顔を見た瞬間、泣きそうな顔になったウルフ様。本当に俺が来るのか不安だったに違いない。そのまま腰にがっしりとしがみついていた。

目線の下にある小さな頭を撫でると、しばらくはされるがまだだったのだが突如ウルフ様は勢いよく体を離す。

「あのっ……ごめんなさい」

「え………?」

何に謝られているのかよくわからず、思わず呆けてしまう。ウルフ様はそのままばたと駆け  
ていき、ソファへと腰かけてしまった。それをちよつと寂しく思いながらも、追いかけるようにし  
て室内へと入る。

「約束通りちゃんと来ましたよ」

「……うん」

ちらりと俺の顔を見ると、すぐに視線を外し俯いてしまう。一体どうしたのだろうか。嫌  
がられていないのは確かなのだが……

「あのね……今日エドガーが何かを持ってきたんだ……先生が来たらキッチンへ案内してって言っ  
てた」

「え、ということは……」

昨日お願いしていたことが叶ったのでは？

ウルフ様と一緒にキッチンへ向かい食材保冷库を開けると、そこにはぎゅうぎゅうに詰められた  
食材があり、テーブルに置かれた箱の中には調味料類が所狭しと入っていた。

そして手紙が一通置かれているのを発見する。早速中を見てみると、これから数日に一度食材が  
届けられると書かれていた。ということは公爵様が許してくださったんだ！ よかったあ！

「ウルフ様！ 今日から俺が食事を作りますからね！」

「え……？ 先生、料理できるの？」

「簡単なものにはなりますが。でも出来立ての温かい料理が食べられますよ！」

食材保冷库に入っていた食材をよく見てみると、肉や魚、数種類の野菜にキノコ類、ベーコンや  
ハムや卵など盛りだくさん。うーん、流石公爵家。男爵家の保冷库とは比べるまでもない。

塩や胡椒などの調味料も充実していて、すぐに料理が始められそうだ。もちろん調理器具類もばっ  
ちりだ。

それなら今日の授業はこれで決まり！

「ウルフ様、今日の授業を説明します。ずばり！ お料理です！」

それを聞いたウルフ様はどういうことかと目を瞬かせた。今はピンとこないだろうが、きつと楽  
しんでもらえるに違いない。

「ですが、まずはここの掃除からです」

昨日はキッチンまで掃除ができなかった。

掃除道具を取りに行き、掃除を始めるとウルフ様も手伝ってくれた。手際もよくなっており、  
ウルフ様の成長を感じられる。

二人で掃除すれば、ほどなくして終わった。これでやっと安心して料理が始められる。

エドガーさんが持ってきてくれた荷物の中にはご丁寧にもエプロンまであった。ありがたく身に  
着けさせてもらう。ウルフ様の袖もまくり、一緒に手を洗った。

「いいですか、ウルフ様。料理をする時は必ず手をきちんと洗うんですよ」

「どうして？」

「手には見えない汚れもたくさんついているんです。そんな汚い手で食材を触ったら汚染されてし

まいます。汚い料理なんて食べたくないでしょう？」

「……やだ」

汚い料理を想像したのか、キュツと眉間に皺を寄せたウルフ様。可愛い子はそんな表情ですらすぐ可愛い。自然と俺の顔もにやけてしまう。

さて、今日は何を作ろうか。用意されたお肉は鶏肉だから、からあげなんかいいんじゃないだろうか。というか俺が食べたい。

鶏肉を見た時点で俺の頭の中には前世で食べたからあげが浮かんでしまった。そうなるとう口の中がからあげ一色に染まってしまう。この世界に「からあげ」という料理は存在しないが、何か聞かれてたら自分が考えたレシピです、と言えば大丈夫だろう。

それに子どもの大好きな味だから絶対喜ばれるはず。ということでメインは塩からあげに決定！それから玉ねぎやベーコンもあったので汁物はオニオンスープ。キノコもあるからコンソメがなくてもいい味が出るはずだ。葉物野菜もあるからサラダは作れる。献立はこれくらいでいいかな。ウルフ様は子どもだしそこまで量を食べるわけじゃないし、ちょうどいいはず。

「ではこれから早速調理を開始します」

ウルフ様には葉物野菜を手でちぎってもらう。その間に俺はドレッシングの準備だ。混ぜるだけだからすぐに終わる。

一生懸命葉っぱをちぎるウルフ様を微笑ましく見ながら、サラダ用のトマトとブロッコリーを切る。ブロッコリーは軽く塩ゆでして冷ましておけばいい。

「ウルフ様、上手にできましたね！」

大袈裟なくらい拍手をして思いっきり褒めてあげる。葉っぱをちぎること自体はとても簡単なことだが、どんなことでも『初めて』というのは緊張する。慣れない作業で手も上手く動かなかっただろう。

子どもの手で一生懸命葉っぱをちぎってくれた。それだけで称賛に値する。異論は認めない。

こうやって褒められたこともなかったのか、ウルフ様は頬を赤く染めて照れていた。なにそれ可愛い！ウルフ様のその姿は正しく天使。

ああ、こんな可愛いウルフ様を見られない公爵様や公爵夫人が可哀想だ。二人に代わって俺が存分に愛でおこう。

次はからあげの準備に取り掛かる。食べやすい大きさに鶏肉をカットし、そこに味付け用の調味料を入れる。あとはウルフ様に軽く手で混ぜ込んでもらい、しばらく漬け置きだ。

次はスープの準備。玉ねぎを薄めにスライスしたら、焦げないよう気を付けながら色が変わるまでよく炒める。そこにベーコンとキノコも入れて炒めたら水を入れてひと煮立ち。軽く塩と胡椒で味を付けて、弱火でコトコトと煮込むだけ。

「いい匂い……」

ウルフ様も小さな鼻をひくひくさせて興味津々だ。でもここからメインの登場だから、もっと食欲がそそる匂いが立ち込めるはずだ。

漬け込んでおいた鶏肉に小麦粉をまぶす。片栗粉と違ってサクサク感は劣るが、小麦粉で揚げる

と旨味をしっかり閉じ込めやすいのだ。しかも冷めたらしっとりとしてくるから、ウルフ様にはこっちの方が食べやすいだろう。

油を温めたら、余計な粉を落とした鶏肉をそつと油の中へ。するとじゅわじゅわと音が聞こえ、ウルフ様にはそれも珍しいのか「うわぁ」と感嘆の声を上げていた。

「油が跳ねることもありますからあまり近づかないでくださいね。火傷するかもしれませんから」  
「わかった」

ウルフ様はいい子だ。ちゃんとこちらが言ったことを守ろうとしてくれる。やんちゃな子だったらこうはいかない。料理もしやすい。

いい感じに色も変わり、からあげの完成だ。できた料理を盛り付けて、そのままダイニングテーブルの上へと並べる。パンも準備すれば用意は整った。

「これで完成です！ ではアツアツのうちに早速いただきましょう」

「今日の恵みに感謝します」

祈りを捧げるとウルフ様はスプーンを握り締めた。どうやらスープからいくようだ。

「熱いのでふーふーと冷ましてから飲んでくださいね」

俺がそう声をかけると、スプーンで掬ったあとにふーふーと息を吹きかけている。そしてゆつくりと口へ運ぶと、ウルフ様は目を見開いた。

「……あったかくて美味しい」

「本当ですか!? よかったです」

ウルフ様は何かに取り憑かれたように夢中になってスープを飲みだした。俺が作った料理は、公爵家の料理人から見ればおままごと同然だろう。

だけど温かいというだけで食べた時の感じ方は全然違う。ウルフ様も温かい料理を口にして、それを実感してくれているんだ。

俺も早速スープに口を付けた。うん、いい出来だ。久しぶりの料理だからちよつと不安だったが、これなら合格だろう。

それからウルフ様はサラダもからあげも「美味しい」と言ってパクパクと食べてくれた。特にサラダは自分で作ったようなものだから感慨もひとしおだろう。

からあげはじゅわつと溢れ出た肉汁で「熱っ！」ってなってたけど、それすら嬉しそうに笑っていた。

そう、笑ったんだ。ウルフ様が。俺は感動で震えた。初めて笑ってくれたんだ。

昨日とは表情が全然違う。引つ込み思案でおどおどとした感じもまったくくない。食事も作業、という感じで昨日はただ黙々と食べていただけだった。

でも今日はどうか。ずっと満面の笑みを浮かべて、食べっぷりもいい。美味しい、楽しいとウルフ様は表情で教えてくれる。

マナーはまた今度ちゃんと教えるが、食べることの楽しさを知ってもらいたいから今日は何も言わない。ただ美味しいものを美味しいと感じてくれた。俺はそれが何よりも嬉しかった。

ウルフ様は残さずに綺麗に食べきってくれた。お腹も膨れたらしく、とても満足そうだった。